+。・∞無限のヒカリ∞・。+

舞依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
＋。・∞無限のヒカリ∞・。＋

【Ｎコード】
Ｎ７０３４Ｃ

【作者名】
舞依

【あらすじ】
誰にも頑なに心を開かない美羽。なんとなく夢を追いかけながら生きる美羽だったが、章大に出会って美羽の人生にヒカリが灯る…。

☆。・。登場人物。・。☆

★。・＋無限のヒカリ　登場人物＋・。★

【大原　美羽】…基本めんどくさがりで自由奔放な中1。歌う事が好き。頑なに誰にも心を開かなかったが・・・、

【安永　章大】…美羽の人生を大きく変えた人。中2で自分よりまず人のことを考えるタイプ。バンドではギター。

【小倉　忠義】…章大と同じ中2。後輩からかなりモテている。おっとりした性格。バンドではドラム

【平拒　由希】…バンドで唯一の女子メンバー。中1で常にテンションが高くバンドのムードメーカー。キーボード担当。

【丸川　隆平】…情熱的で明るい中2。由希とはお笑いコンビのような関係。

【神名　葵】…美羽と同じクラス。美羽に積極的に話しかけるが冷たくされる。サバサバしていて周りからの信頼も厚い。

【綾ヶ原　夏依】…葵と共に美羽に話しかける。少しワガママで裏表が激しい。彼氏がいるが上手くいっていない。

☆。・。登場人物。・。☆（後書き）

初の小説です♪
これは私のブログで連載中の小説を訂正したものです。
これからも頑張るので応援よろしくお願いします！！

…STORY∞1…

心の奥、ずっと探していた…

あたしの輝ける場所。

あたしの居場所。

眩しいくらいのヒカリを…。

+。・∞無限のヒカリ∞・。+　…STORY∞1…

≪自分のままに≫

―生きる事に意味なんてある??

人は永久の命を求むけど…

人は生きる意味を探すため生きている、そう言うけれど…

あたしには分からない。

この世の全てがモノクロの世界。
意味のあることなどあるの??
答えなんていらない。だけど…
どうして人は生きたいのですか――――…

自分を閉ざしたあたしに未来はあるの??

～昼休み～

美羽『進路…調査』

葵『はぁぁ!!?うちら、まだ中1だよ!!??』

夏依『ホント信じらんな～い』

中学校に入学して…約9ヶ月。

突然配られた進路調査に、教室は騒然とする。

進路とか…面倒。

…ってか何故に葵と夏依はあたしについてくんの。

邪魔くさいな。友達とかいらないし。そーゆーのウザイし面倒。

葵『でもさ、ホント漠然とした夢とかでもいいらしいよ！！』

夏依『え、じゃあ、あたしお嫁さん～♪』

葵『…あんたは相手いるからいーですよね～』

夏依『葵は、モテるのに皆フッてるんじゃん！！！勿体無いなぁ』

うるさい。凄い迷惑なんだけど。

2人の会話が耳から抜けて消える。

夏依『ねっ、美羽の夢は！！？？』

夏依はいかにも『美羽に夢なんてないよね！！』そんな眼でこっちを振り向いた。

美羽『――知らない、何であんたに教えなきゃいけないの』

ガタッ

わざと音を立てて席を立つ。教室は一瞬にして静まり返る。

葵『え、ちょ美羽～！！？？』

美羽『……帰る』

そう一言言い残して、あたしは教室を去った。

夢…??そんなこと、意識したことない。

だけど…だけど…好きなことは、ある。

外は憎らしいほどの快晴。あれほどまで暑かった日々は過ぎ去って…

あっという間に表情を変えた。

校門の前、あたしは足をとめる。

そして…学校へ戻った。

教室に戻るわけでもなく、ほんの少し駆け足で階段を上る。

そしてある教室へと足を運ぶ。

「音楽準備室」

別名…物置。音楽準備室なんて名前だけ。

ほとんど使われてないらしい。

美羽『…んっ、あった…』

そしてあたしはあるモノを取り出して、駆け足でまた階段を上る。

ガチャ…

美羽『はぁー気持ちいい…今日の天気最高』

屋上。普段は開放されているのでいつでも入れる。

ガタッ…

音楽準備室から取り出した…ギター。

自分のギターを、音楽準備室に隠している。

誰も使わないから、バレない。音楽準備室なんだから、ギターがあったって自然な事。

階段を急激に上ったため、乱れた息を整える。

スゥ…

≪見上げた空の青さと…振り向いた着物笑顔が　眩しいくらいに重なり合って…≫

あたしのほぼ毎日の日課。

屋上で、歌うこと…。

小４の頃、ギターを初めて触ったときから…

音の魅力に引き込まれていった。

最初の頃は流行のアーティストのコピーやマネだった。

だけどだんだん…心に言葉が積もって、、

今は自分で…詩を書いている。

自分の音楽が創りだされていくのが嬉しくて楽しくて…

今、音楽に夢中なんだ。

この詩はあたしだけのモノでこの先誰にも聴かせることはないけれど。

だけど…これがあたしの音楽だから。

失いたくない。

…STORY∞1…（後書き）

第1話です。
この作品は基本暗めですが、
書いてる自分自身は楽しみたいと想います！！
感想など、是非お聞かせください。

…STORY∞2…

この想いも微かな願いも…あたしだけのもの。

譲れないたった1つの強さだから、誰にも触らせない…！

＋。・∞無限のヒカリ∞・。＋　…STORY∞2…

≪夢幻(むげん)物語≫

いつかこの強がりが崩れる日はくるのかな??

あたしが人に弱さを…笑顔を向けられる日はくるのかな…??

怖い…怖いよ。

キーンコーンカーンコーン…

5時限目の終わりを告げるチャイムが鳴り響く。

夏依『超〜〜暇なんですけどっ』

葵『そしたら勉強しろよっ！！』

夏依『嫌だぁぁ（（笑』

葵『そしたら部活入りなよぉ』

夏依『部活とかウルサイ！！！あたしは運動音痴だも〜ん』

葵『文化系の部活だってあるじゃんね』

夏依『昴もヒドイよ〜カレカノなんだからデートくらいしたっていいじゃん…』

ガラッ

激しい音を立ててドアが開いた。

美羽『……』

…ドア、勢いつきすぎたかな。

何か皆、微妙にビビってるし。

夏依『え…っ美羽、もう5時限目の終わりだよ！！！？？？』

そんな事知らないわけないじゃん。

葵『先生も心配、してたよ…？』

葵が不安そうな顔であたしの顔を覗き込んだ。

美羽『…学校、来ただけいいじゃん』

バンッ

自分のスクバを机に叩きつけるようにして置く。

わざわざどうして、こんな面倒なトコ来なきゃいけないのさ…

葵『美羽、次音楽だよ。一緒に行こ…』

美羽『———屋上行ってくる』

葵の言葉を遮るようにしてあたしは言い放った。

夏依『せっかく来たのに、サボるの！！！？』

夏依を無視して、あたしは教室を離れた。

屋上へ続く階段を…ゆっくりのぼる。

美羽『――――??』

これは…ギター　の音??

誰が弾いてるの??凄く、上手い――

澄み切っていても真っ直ぐな音。

こんな音、出せる人がいるんだ…

ココロの中で少しだけ想った。

だけど…屋上はあたしの特等席。先客がいることに腹が立った。

美羽『…ッ』

このまま屋上には入れない。教室にも戻りたくない。

帰ろう…かな??だけど、来たばっかで帰るのは流石に意味がない。

さっきから、耳の中にギターの音色が響いて止まない。

心地よい音色に少しだけ穏やかになれる。

ここの階段は…トビラの陰になってるから居てもバレない。

ここで…寝てようかな――

もう少しだけこの音色を聴いていたい。

その想いが…あった。

こんなにも他人(ひと)のものに惹かれるなんて…

あたしらしく、ないな。

あたしは静かに横になった。

やっぱり…上手　だな。

…結構、寝たなぁ

屋上の小窓から夕焼けの光が零れて眩しい。

あれ、ギターの音、ない？

横になりながらボーっとしてこの状況を整理する。

『あっ起きたんけ！！！！！』

美羽『！！！！！？？？？？？？？？？？』

だ、誰？？

思わず勢いよく飛び起きる。

大きな瞳――――――…

背は小さいけど…肩とかはしっかりしてて。

仔犬のような可愛さがある。

そして――片手には、ギター。

この人、だったの？？さっきの音色は…。

章大『急にビックリさせてゴメンなぁ！！！俺、２年の安永章大っていいます』

その章大？？っていう人は眩しいほどの笑顔であたしに言った。

ま、眩しい…何でこの人の笑顔はこんなにも眩しいの。

恥ずかしいとか驚きとか呆れたとか…様々な想いが心の中で交差する。

美羽『…ってか何??何でココにいんの』

照れ隠し…寝起きの悪いあたしは彼にキツイ言葉を投げかけた。…いつもと変わらないけど。

章大『さっきまで屋上にいたんやけど、人がココで寝てたからなぁ』

美羽『〜〜〜〜っ／／／／／／／／』

寝顔ッ…見られたぁ〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！ヤバイ超恥ずかしい。

何であんな無防備に寝てたんだろぉ！？

安永…先輩、そういば聞いた事あるかも。

ギターの天才だとかで校内じゅうでモテてるとか。。

葵とか夏依も…話してた気がする。

章大『…あのさ』

美羽『はっ、、、、はい！！！！？？？？？』

何でこんなに固まるのさ！？

あたしおかしいよ〜〜〜。

章大『この間、屋上(ソコ)で歌、歌ってたんなぁ??』

美羽『!!!!!!!!??????????????』

本日2度目。何コレドッキリですか??みたい勢い。

章大『その日俺も屋上行こうとしたんやけど…歌声聴こえてなぁ』

…この人、何??

章大『凄いキレイやったから…ちょっとだけ聞いとった』

聞かれてた…あたしの歌を…この人に。

俯いてた顔を前へ向け…

美羽『っ／／／

すくっと立って一刻も早くこの場を去りたかった。

なのに…

ガシッ

美羽『！！！！！！！！！？？？？？？？？？？？？？？？（（照』

あたしの…腕を包み込む、安永先輩の腕。

この人はっ…この人は……

ココロ掻き乱す、いけない人。

章大『大原…美羽チャン』

聞かなくても知ってるんじゃ～ん…じゃなくて！！！！！

な、何で知ってんの！！！？？

美羽『やだっ離して！！！！』

少し抵抗するけど敵わない。

こんなに可愛くても、ちゃんとした男らしい腕で…力強くて。

章大『俺等と…バンドやらへん？？』

バンド――――――――――――――――

美羽『はっ??』

展開が読めないんですけど!?

章大『俺等今な、４人でバンドやってんねん』

４人って、それなら充分じゃ…

章大『だけど肝心のボーカルがおらへんねん』

ボーカルいない!!?それって、バンドって言うの??

美羽『だからって…何であたしなんですか』

章大『屋上で聴いたあの声は本物やった』

ドキッ

美羽『むっ無理です!!』

必死に否定する。

章大『メンバーに顔合わせだけでもっ…お願い！！！！！』

真剣なんだ。これは。

だけどそんな真剣なモノにあたしが入るとか余計に無理だし！！！！

だけど…だけど――

美羽『それなら…』

章大『それならｏｋ！！？？？？やった！！おおきにな！！！！！』

は、はい！！！！！！！？？？？

…STORY∞2…（後書き）

2話目終わりましたぁぁー！！！
キャラ動かすのがだんだん楽しくなってきました♪
次回からは由希や忠義・隆平も登場しますっ！！！

…STORY∞3…

新しき扉を開けて…強く強くただ進む。

光り輝く明日を求めるのなら何かを裏切ることなのかもしれない。

暖かい日だまりの様な手が…氷のココロを溶かしてくれた。

＋。・∞無限のヒカリ∞・。＋　…STORY∞3…

≪日だまりの魔法≫

この希望が確かな形で無ければ

また1つあたしは何かを無くしただろう

だけどこの希望が確かな形なら

また1つあたしは何かを得ただろう…

美羽『っハァ、ハァ』

どこまで行くの??学校を出て…もう7・8分走ってる。

息が切れて苦しい。

章大『…!』

ピタッ

美羽『っきゃあ!?』

急に止まったからビックリした。

章大『ゴメンっゴメンなぁ!!?ずっと苦しかったんな!?』

あたしが息切れてるのに気づいてくれて止まったの?

必死に何度も頭を下げて謝る安永先輩。

こんなに一生懸命謝られたら…こっちが悪いみたいだよ。

美羽『―大丈夫、です』

安永先輩の真っ直ぐな視線を避けて思わず冷たく言い放つ。

章大『――――…じゃ、行こか』

――――――――――――――あ…

美羽『…っ』

安永先輩の…悲しそうな、笑顔。

こんなに優しい人にあんなに悲しい顔させた。

切ない気持ちがあたしを占拠する。

ココロを鉛が覆いこむように。

ごめんなさ…い先輩。

傷つけてごめんなさい――――――――

しっかりと握られていた手が少し緩んだ。
あたしに、気遣ってくれてる…

しばらく歩くと公園が見えた。
騒がしい声が聞こえてくる。
あれが、もしかして。
その騒がしい人たちはこちらを見て嬉しそうに手を振った。
あぁ…やっぱりそうなんだ。
由希『ヤス～遅いねん！！！超疲れたんやけどっ！！！』
忠義『まだ１０分もたってないやん』
章大『由希は短気やから待ちきれないんやもんな！！』
その由希って人は安永先輩に膨れっ面をして怒る。
章大『とーにーかーく連れてきたで！！！例のギターのコ！！！』

隆平『ハー――――イ待ってましたぁぁぁ→』

その3人の視線は一気にあたしのところへ。

な、何かかなり…面倒なことになりそう。

ってか安永先輩この人たちに、あたしの事話してたんだ。

由希『はぁ～♪やっと女子メンバー仲間が出来るッ！！！！』

ちょ、まだ入るなんて誰も言ってないし――――

章大『それはまだ決まってへんよ、俺が強引に連れてきたんやもん』

隆平『ヤスは女の1人も口説けへんのかっ』

由希『ヤスには無理やってぇ！！』

1つの話題に皆が食いつく。飛び交うお笑い芸人のようなボケとツッコミ。

この人たちは関西人の血ぃ思いっきり流れてるんだな。

忠義『まぁまず俺たちの事知ってもらいましょか』

低くて落ち着いた声…凄く背が高くて大人びた顔立ち。正直、凄くカッコよすぎ。

由希『はいはーい♪♪1年B組の平拒由希でぇぇす！！！！！！バンドではキーボードやってます！』

声のトーン、そしてテンションが高い…。でも性格とは反対に漆黒の髪が風に靡いてパッチリした瞳、

スッと高い鼻。可愛いというより綺麗の言葉が似合う。

1年にこんなコいたっけ??

隆平『2年D組丸川隆平で～～～～す！！！！！！ベース担当です！！！ッパー――――――ン！！！！！！！』

ぱ、パーン?????

こっちもテンション高いな～…丸川先輩、は笑顔が憎めない。切れ長の瞳、筋の通った鼻。

忠義『えっと…2年A組、小倉忠義です。バンドではドラムを担当してます』

小倉先輩…か。こんなカッコイイ人が、あたしの学校にいたとは。

他の3人とは違って…凄く落ち着いてるな。

この、のほほ～んとした空気に癒される。

この空気、嫌いじゃないかも――――。

って、何考えてんのさ、あたし。。

章大『一応、俺も！安永章大、２年Ｄ組です！！バンドではギター担当してます！』

にかっと可愛く笑う安永先輩。

あたしは、どうしたらいいのさ、この空気の中。

こんなに眩しい人たちの中、あたしが生きていけるわけがない。

汚れきったあたしを眩しく照らすヒカリなんていらない。

誰もあたしなんか見なくていい。

章大『美羽チャンも、一応…自己紹介してや？』

安永先輩…さっきの事であたしに凄く気遣ってる。

美羽『…っ1年C組、大原美羽です…』

あたしはか細い声で呟く。その顔に笑顔なんかなくて…

一瞬にして安永先輩達から笑顔が消えていった。

章大『…んでさっ、美羽チャンバンドの事…は一応考えとってくれた??』

美羽『考えて…って、あたしにはそんな気ありませんっ』

面倒な事になるのは嫌だから、あたしは自分の気持ちをハッキリと言い放った。

〜〜〜♪〜〜♪〜

…ベースの音?

隆平『その言葉は俺等の音楽、聴いてから言ってもらいましょか』

由希『あたしらには…美羽チャンが必要やねん』

――――――――――必要??

誰が??誰を??何を必要としてるの?

そんな言葉…誰が信じるの?

～～～♪～～～♪～

【いつも夢の中虚しすぎる毎日が　時を流して過ぎ去っていく

眩しすぎた明日ならもう　君がいることさえも嘆くから

深い闇も　暗い世界も　ココロを揺さぶって止まないんだ―――】

今は…安永先輩が歌ってるんだ…。

綺麗な旋律…上手だな。

この人たちは『本物』なんだ。

忠義『コレが、俺等の音楽…やねん』

俺等の音楽…？

じゃあ、あたしの音楽の在処はどこ？？

ってか安永先輩、かなり歌上手じゃん。

あたしいなくてもよくない？？

必要なんて、所詮綺麗ごと、気休めの言葉。

由希『あたしっ美羽チャンの歌――聴きたいっ』

仲間なんていらない。何にもいらない。

あたしは1人で生きていくの…

だからお願い、誰も触れようとはしないで。

やめてっ――――――やめて！！！

章大『美羽ちゃ…』

安永先輩があたしの腕を掴んだ。

美羽『ゃっ――――――――――嫌！！！

美羽『そんな馬鹿みたいな音楽ごっこに付き合ってらんないから…！！！！！！』

苦しくて苦しくて…逃げ出した。

行くところなんて決まってないけれど

とにかく逃げたかった。

美羽『――――――――――――っっ』

人気のない路地で倒れこむ。

涙と悲しみだけが溢れて…

あたしはどうしたいの？？どうしたらいいの？？

…STORY∞3…（後書き）

3話、書きましたぁぁ
美羽はだいぶ壊れてますね…（（汗
まぁそんな美羽を暖かく見守っていきたいです。

…STORY∞4…

真っ暗な底なしの海　あたしを誰か受け止めて…
こんなに広くて深いなら　いつまでも笑えないよ

＋。・∞無限のヒカリ∞・。＋　…STORY∞4…

≪雫心・幻涙≫

いつもいつも独りきり　ヒカリ求める明日を探して
その優しさだけが唯一の切なさで愛しさだった…。
前にも後ろにも動けなくて　ずっと立ち止まったまま　未来へ笑う
君達を見ながら

美羽『っ…あぁぁ』

ねぇ美羽??どうしたいの??あたしはどうしたいの――

怖いよ、怖い…よ

ポツ…ッザ――――――――…

雨…

傘なんて持ってない、雨宿りできるとこなんてない

ここがどこなのかも分からない…

もうあの公園にも戻れない。

濡れていく…髪も制服も心も

この綺麗な雨で…荒んだ心も悲しみも…流して――

下がる外の気温に肩が震える。

吐息は白くなり頬を赤く染める。

この状況、はちょっと…ヤバいと想う。

あたし…このまま死んじゃうんじゃないの。

楽になれるなら何でもいいから…どうなってもいいから

楽にさせてよ――――

章大『美羽！！！

美羽『――――――――――！！？／／／／／／／／／／／／／／／』

強くあたしを抱きしめる安永先輩。

速まる鼓動が先輩にまで伝わりそうで怖い。

章大『ほんま…アホかぁ、凄い心配したんやで??』

口調が優しくなる。胸が締め付けられるように切なくて、俯いてた顔をふと、正面にした。

安永先輩の、悲しげな顔――

美羽『ッ――――――ごめんなさ…ぃっ！！』

…あたしの涙は、枯れる事を知らないみたい…。

美羽『ほん…と、いろぃろっ…ごめ…んなさい！！ごめんなさぁぁぁあい！！！！！』

安永先輩の腕を必死に掴んで泣き叫ぶ。

今まで溜まった想いが一気に溢れ出したように。

しっかりと抱きしめてくれたその温もりが優しくて安心する。

雨もだいぶ小降りになって、安永先輩は羽織っていたジャケットをあたしに着せてくれた。

そしてあたし達は雨の当たらないベンチに座った。

そして…ずっと泣き喚くあたしを、安永先輩はいつまでも抱きしめてくれた。

美羽『…ッグスッ』

章大『……だいぶ落ち着いた?』

…かれこれ、1時間は泣いた。

もう、これ以上迷惑かけらんないし、、

美羽『…おかげ様で、落ち着きました』

あくまでも冷静を装うけれど、まだ本当は抱きしめて…ほしかった。

そんな事を想うあたしは…おかしいのかな。。

もう、自分らしさを失ってるよ、こんな自分。

――――違う、違うよ

これが、本当のあたしなんだ…。

章大『…家どこ??送るよ』

美羽『えっ、そんな、いいです!!!』

章大『どっちにしろ、ココがドコかもわからへんやろ??…暗くて危ないやん』

美羽『〜〜…じゃあ、お願い、します』

章大『はいっ、じゃあ後ろ乗って！！』

美羽『えっ？？』

あ…自転車で来たんだ、

美羽『じゃ、じゃあ…失礼します／／／』

章大『…ぷっ、自転車乗るのに<失礼します>はないやろ（（笑』

だって…何か、ねぇ。

雨上がりの冷たくて澄んだ風が吹いた。

周りの木々と葉は優しく音をたてる。

見上げた空は…一等星が輝いていた。

章大『…バンドの事は、もうええよ…。変に負担かけて無理させて…ほんまにゴメン』

美羽『なっ、何で安永先輩が謝るんですかっ…先輩は何も悪くないです』

今は自転車の後ろに乗ってるから…先輩の表情は分からないけど、
また悲しい顔をしてる気がする…。
章大『…とにかくゴメンな』
美羽『どして…。あっ、、ソコ次右に曲がってください！！！』
章大『えっ！！？あ、こっちか』

あたしの家に着いた。
美羽『先輩…ホントにありがとうございましたっ』
章大『いや、迷惑かけてゴメンな、ってか、家遠いんやなぁ。学校から1時間はかかるやんな』
美羽『はいっ、でも、もう慣れました』
章大『（（笑　そっか…それ故に、いい家住んでんやな…羨ましいわ』

美羽『へっ！！？』

章大『…じゃあな、美羽』

少しだけ名残惜しそうに呟く先輩。

美羽『――――――――――…っ』

美羽『こ…んど、バンド練習、見に行っていいです…か？？』

安永先輩は…凄く凄く嬉しそうな顔をして、

章大『いつでも、おいでやっ！！！！！皆待っとんで！！！』

…そう言った。

美羽『はいっ…！』

あたしも思わず、笑った。

この時、確かに…小さいけれど眩しい希望が見えたんだ。

あたしの中で何かが目覚めた。

…STORY∞4…（後書き）

第４話！！やっと美羽も心の鍵を出そうとしてますね。
彼女はゆっくりですが前に進んでいこうとしてるので、
見守っていきたいです！

…STORY∞5…

雨の中暗闇の中　あたしを助けてくれた。

初めての温もりが心地よくて…

悲しみに溢れた昨日のあたしは…もういない。

＋。・∞無限のヒカリ∞・。＋　…STORY∞5…

≪自分色≫

優しさに溢れたい　笑顔に溢れたい

君が傍にいるから　そう想うんだ

君が笑っているから　笑うんだ

あたしは葵、そして夏依と毎日喋って遊んで…クラスでもいつも笑っていた

他の人から見たら当り前かもしれないけれど、あたしにとっては大きな幸せ。

大きな大きな幸せ。

一歩ずつだけどあたし…前に進めてる。

そんな希望があたしをワクワクさせた。

葵『美羽…ホントに最近どしたんだろ？？？』

夏衣『凄い明るくなった、ってゆうか…変わったよね』

葵『でも、それで良かった！美羽の笑顔が見れて…』

夏衣『でもさー、あたしらがあんなに頑張ったのに！！美羽を変えたのは何なんだろうね？？』

葵『…』

お、大原美羽、ただ今…第1音楽室専用倉庫前で心の葛藤中…！！！！

だって…だって、ここから聴こえるんだもん。

あの優しい歌声が――

ど、どうしよう！！？入ろうかな！？でも…入ったらあたし、確実にバンド入るって想われるよね？？

でも、入りたくない…わけじゃないしっ！！てか…むしろ――

あ～もぉ、迷ってないで早く…でも歌ってる途中に入ったら邪魔だし、迷惑じゃない！！？？

いや、でもそんな事言ってらんないし！！！！よし決めた！入る！！

心の中で固く決意して小さなガッツポーズをした。

そしてその扉のドアノブに手をかけようと…

ガチャ

美羽『…え??』

まだ、手をかけてないんですけど??

めっちゃ混乱する、、勝手に扉が開く、この状況が読めな…

章大『あっれ、美羽やん』

キタ――――――…　眩しいその笑顔、混乱してるあたしには刺激が強すぎなんだけど…。

え、何で安永先輩が??いや、この部屋にいたのは安永先輩だから変な事ではないんだけれどもっ

ヤバイって、凄いパニクってる～；；落ち着けあたし！！！

章大『な、何しとんの？？』

え、あ…今、めっちゃ変な女想われたしっ

どうにか言い訳…

美羽『～～～～～っ／／／／／／／』

頬が熱い…あたしは今確実に顔の体温が急上昇して林檎以上に真っ赤な状態なんだろう。

章大『もしかして、バンド見学来てくれたん？？』

もうここまで来ると言い訳なんて必要もなくなった。

俯いたまま、首を縦にふった。

章大『…ほんまにっ！！？』

安永先輩の声色が一瞬にして変わったのが分かった。

恐る恐る俯いた顔を正面に戻す。

そこには、直視できないほどに眩しい安永先輩の笑顔。

思わずまた、顔を俯かせた。

美羽『ほんとに…』

控え気味に答えたあたしの声は、ある甲高い声にかき消された。

由希『美羽ーッ！！！！！！！！』

美羽『…ゆ、きちゃん』

ガバ――――ッ

お、思いっきり飛びつかれた。

その反動であたしと由希ちゃんは床に倒れた。

か、肩やられた…！！ヒリヒリ痛い…；；

由希『こ、この間はゴメンっ！！！ほんまにワガママで…自分勝手でゴメンね！！！』

必死にあたしの前で謝る由希ちゃん。

何ていうか、憎めないよね、この子。

美羽『…もぉ大丈夫だから、気にしないでいいよっ！！！』

由希『美羽ぅぅ～～～～～～』

え、泣いちゃうの！！？

章大『お前は…また泣くんかぁ～』

いかにも呆れた、という風に安永先輩は言った。ってか、、またって何??

由希『グズッ…美羽、あたしの事はぁ…由希でええよぉぉ〜』

涙まじりの声。す、凄い本気泣きですか??

美羽『じゃ、あ…由希!!泣かないでよっ〜』

少しぎこちないけれど、何か『友達』って感じがいい。

美羽『うんッ!!』

また、あたしは1歩進めた…かな

安永先輩に案内されて、バンドの練習場所（自称）へと入った。

思ったよりも広くて、楽器などは綺麗に整頓されている様子だった。

美羽『わぁ、、広ッ』

由希『でっしょ〜!!意外と広いんよココ♪』

美羽『コレ、先生に見つかんないの??』

いや、そんなはずは絶対にない、防音機能はあるけれど普通に歌声

とか漏れてるし。。

由希『まあ…あんまそこら辺は気にしなくていいよ！！』

え、気にしなきゃダメでしょ！？

ガチャ

章大『あ、来たぁー』

忠義『…っはよー』

欠伸しながら入ってきたのは小倉先輩。

バチッと一瞬、目が合った。

忠義『…あ、こんちは』

美羽『こ、こんにちは…』

やっぱり…空気が何か違うなぁ。

章大『マルは？？また補習？？』

忠義『さっき…廊下でテッチャン（鉄山先生）に捕まってたで』

ほ、補習？？まじですか？？

由希『あたしは今日、何とか逃げてきたから大丈夫だよぉ』

逃げ！！！！？？？？

こ、この人たちは…

ダダダダダダダダダダダダダダ…

確実にココへと近づくリズミカルな足音。

バ――――ン

隆平『パ――――――――ン！！！！！！！！！』

めっちゃ勢いよく開かれた扉の音と、丸川先輩の決め台詞。

凄くタイミングがピッタリで笑える。

隆平『美羽ちゃん今日もテキサ～～ス！！！！！』

美羽『てきさ…す？？』

丸川先輩の笑顔につられて少し引きつった笑顔をあたしは見せた。

会話になってないんじゃん…

章大『あ、美羽に言っておきたい事があったんや！！』

言っておきたい事??

章大『あのな、俺等…』

由希『ライヴ出来ることになったのーーーーーッ!!!!!!!!!!!!』

ライヴ!!??

忠義『まあ…学校祭でな』

隆平『だから今、ココ使わせてもらって練習してるんよ』

なる…ほど。

ってか、ってか――――――――

あたしも、出たい。

めっちゃ今、そう思うんですけど。。

章大『美羽、どうする??』

胸の鼓動が『早く』と急かす。

もう、これ以上自分に嘘はつけないよ――

美羽『あたしっ！！！！バンド入ります！！！！』

大原　美羽　　今…人生の転機真っ只中。

人ってこんなにも単純なんだ。

だってあんなにも開かれる事を頑なに拒んだ心が、簡単に開かれてしまったんだもん…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7034c/

+。・∞無限のヒカリ∞・。+

2010年11月2日03時49分発行